向陽新聞
高知市塩屋崎町1-1-10
土佐中・高校新聞部
編集人　吉本匡伸
発行人　樋口豪
印刷　高知印刷

写真
TEL 72 6758
大丸東入口前
高橋

特集　夏休みに拾う

念願叶った初戦
地元の親切に敬礼

総体紀行①

バドミントン

▽七月二十日より始まった、四十日余りの長かった夏休みも終わりをつげた。
▽今度の夏休み本校でも、関谷、永野両先生の御結婚に始まり、野球部の予選での活躍、柔道、テニスなどのインターハイ出場、伊藤先生が中国、奥谷先生がアメリカと海外へいかれるなどいろいろなことがあった。また、各個人個人においても、キャンプや登山あるいは勉強や読書にと有意義に楽しくすごしたことであろう。
▽今回はこの夏休みを特集し、本校生の夏への挑戦をいくつか拾ってみた。

△△△△△△△△△△

七月三十一日午後四時三十五分とうとう我々の目的地新庄に到着した。丸一日かかってやっと着いた新庄の町は、ごく普通の地方の小都市だった。さて肝心の旅館は…。駅まで迎えに来てくれたマイクロバスは、我々ののぞみを打ち砕きながら田舎へ田舎へと走った。よどんだ最上川に別れをつげ山の中へ。国道から約五分登って着いた所にあったものは、うっそうとした林の中に旅館が三軒だけだった。

さて、翌る日八月一日は新庄市体育館でのバドミントンの開会式。この体育館というのがすごかった。バドミントンのコートがなんと十二面、つまり県民ホールの倍の広さだ。何ともうらやましい限りだ。その会場へ我々も土佐女子と並んで入場。開会式とは選手より来賓諸氏のものだ。熱気の中に立つ事三十分。復帰後初の参加の沖縄県の男の子が床に伏していた。それから次々に〝バタッ〟〝バタッ〟歓迎のことばを長々としゃべっている地元の高校のかわい子ちゃんが憎かった。

翌日には最大の目標である団体戦が行なわれた。とにかく、ここ数年、高知県の男子は団体、個人を通じて一回戦にさえ勝っていない。だから、我々としても一回戦だけは絶対勝とうと話し合っていたのだ。その一回戦、相手は名古屋電気工業だ。それ程強い相手ではない。第一ダブルスは、岩田（二S）と僕。二人とも鈍感なのかあがりもしなかった。あがるどころか一セット目セッティングの2対1とゲームカウントをとられた時もあせりもせず、かえって、高3同士のペアである相手がかたくなってミスする所につけこんだ。17−16でこのセットをとると、二セット目は簡単に15−7でとってこの試合をものにした。続く第二ダブルスも中瀬（二K）、美馬（二T）組が相手を圧倒。15−8、15−3の2−0でとった。そして、勝負をかけた第一シングルは島本（一T）が立ち上がりかたくなって苦しんだが、その後、持ち前のフットワークのうまさでしだいに点を重ね、第三セット14−12とマッチポイントを迎えた。立ち上がって見守るベンチ。三本程ラリーがあったあと、相手のクリアーがサイドラインをわった。〝やった〟とうとう勝った。僕と中瀬は興奮してベンチを飛び出していた。こうしてともかく一回戦は勝った。しかし、全国との実力差はどうしようもなく、二回戦では市立桐生商に簡単に負けてしまった。

ところで、前にも云った通り旅館の近くには何も無いので、試合へ行った時、街で買い込んで来るわけで、特に試合の無かった三日は、二時間程新庄の街をぶらついた。そこで気がついた事だが、市全体が我々を暖く迎えてくれているということである。東北の人らしい素朴な暖さを感じたのは僕だけではなかったと思う。旅館の人達も皆親切で、おひつで御飯のおかわりをもらいにいくような我々をいやな顔一つ見せず、もてなしてくれた。

こうした雰囲気に元気づけられて迎えた個人戦だったが、岩田と僕のダブルスは相手のレシーブのうまさに手をやき、あと一本がとれず負けてしまった。また、シングルスの島本は強敵に経験の差で押し切られた。僕は相手が弱く、一回戦は何とかものにしたが、二回戦で昨年のダブルス三位、今年二位の人と当たり、全く手も足も出ず、わずか十分足らずで負けてしまった。

シングルスが終わるとすぐに、駅から汽車に乗るというあわただしさであったが、この遠征、当初の一回戦突破という目標は果たしただけに、部員の顔には満足そうな表情と、あの娘の待つ高知へ早く帰りたいという心が浮かんでいた。

（二N　小村彰）

主張　四無主義からの脱出

最近、高校生の四無主義ということがよく言われている。無気力・無責任・無関心の従来の三無主義に無感動の加わった四無である。

ある学校の高一を対象としたアンケートの結果によると、〝あなたは三無主義か〟という質問に対し、三分の一の者がイエスと答えている。（実際はもっと多いとか）また、〝高校生活に三無主義は定着している〟という質問には半分以上の者がイエスと答えている。〝最近何かに大きな感動をしたか〟という質問には半分近くの者がノーと答え、〝学校で何か行事があるとしたら君は積極的に参加するか〟という質問に対しては四十七%の者がノーと答えている。これは、入学したばかりの高一生に聞いたものであるから、高二高三に聞いた場合、もっと三無主義者は多いのではなかろうか。

このことは、このアンケートをとった学校だけに限ったことではない。我校の生徒にも充分いえることであろう。まずその現われが執行部の問題である。

最近の会長、副会長の選挙は、なり手が少なくほとんどが信任、不信任投票で全く、盛り上りのない募集では定員に足ることがなかなかまきれもない。ほかの文化部の低迷も同様である。

また最近の運動会や文化祭はパットしない。これも生徒の関心が薄く、りっぱに成功させようという気力が足らないためであろう。

では、この四無主義を追放するためにはどうすればよいか。学校生活での四無主義をなくするには、学校の活動や行事にもっと関心を持ち、参加することである。

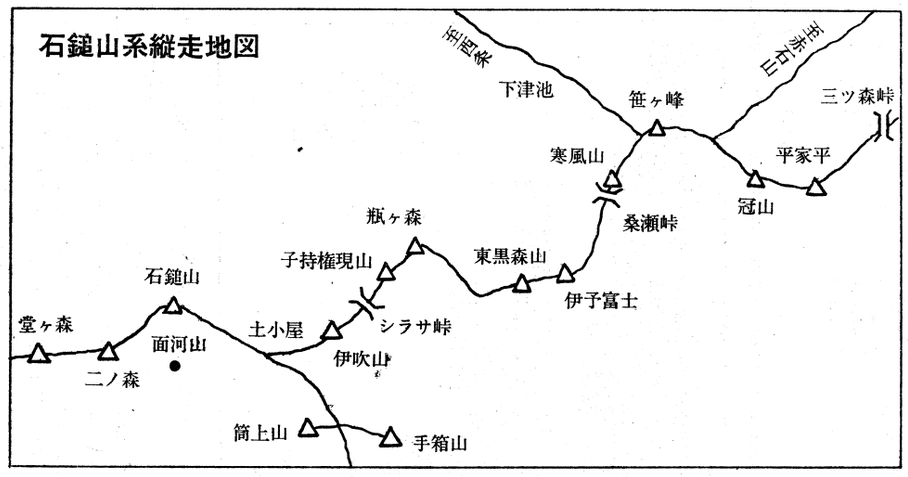
会長、副会長は決まったが、執行部を作るのがこれまたたいへんである。正副会長同様やり手が少ないのである。必死の思いで人手を集めて遅れての発足である。現在では遅れて発足することが普通となっている。

こうして発足した執行部にすばらしい活動を望むことは無理である。生徒自治は低迷していくばかりだ。これは四無主義よりくこっぱなものにしようではないか。

もうすぐ運動会が始まるし、後期執行部も発足する。来年二月には、待望の文化祭がある。四無主義から脱出し、これらの行事をりっぱなものにしようではないか。

「山恋しければ、君恋し」
美しい笹ヶ峯の夕やけ

登山紀行



七月二十六日

台風による長雨で出発が延び延びになっていたが、やっと天候が回復、ようやく出発の運びとなった。

午前八時に集合。荷物の点検とパッキングを済して、十二時二十九分の汽車に乗り、山への第一歩を踏み出した。タクシーで安居渓谷まで行き、そこで明日からの本格的な登山に備えて、キャンプインした。

七月二十七日

今日は最もつらい行程が予想される。そこで三時半起床、六時十五分からの早立ち。大滝神社までは森林地帯である。林用軌道の跡で足元が危ういし。大滝神社を越えると道は急傾斜になってくる。手箱越直下までは、かなりペースがおちてしまった。暑さと一週間分の重い荷物で一歩一歩が実に苦しい。手箱越につく北からの涼風が迎えてくれた。とても静かだ。あまり人が訪れないのだろう。ここからだと筒上山へは二十分、手箱へも一時間あれば行くことができる。しかし何といっても、このあたりから望む石鎚山の山容はとてもシャープですばらしい。五時十五分に土小屋に着いた。俗化され、スカイラインで無残に荒らされた山肌が残念でならない。しかし時々、雲の間からのぞく瀬戸の島々と西条の町はすばらしかった。

七月二十八日

今日は荷物を置いて二ノ森まで往復だ。途中、石鎚山頂へ登る。出発前には、ガスのせいで視界がきかず、雨が心配されたが、案の定、石鎚山頂でもガスが晴れず、景色は見えない。二ノ森への縦走路は見晴らしのいい稜線上にありいつしかガスも晴れて景色は抜群だった。しかし、やはり石鎚付近は人が多い。おまけに最近汚れが目立ち、かなり俗化している。石鎚の自然もすでに失なわれつつあると思う。

土小屋に帰ってきたのは三時五分頃だった。少しパンを食べて夕闇の中を行く。伊吹山からシラサ峠へ。今日の行程は無事終わり、シラサ小屋に泊まることにした。

七月二十九日

六時三十分出発。子持権現までは背丈位のやぶの中だ。朝露でびしょぬれになってしまった。子持権現には頂上から鎖がかかっている。我々はその鎖をつたって登っていったが、下りるのがまた大変、この山は遠くから見ると、コップを伏せたような形をしている。景色は抜群。石鎚山系が手にとるように見える。そして、ワンピッチで瓶ヶ森に着く。この山と石鎚山とは、すぐ近くにありながら山容はまったくと云っていい程、対称的だ。行ってみたら一番わかると思うのだけれど石鎚がそそり立つ岩峰なら、瓶は全く女性的というかなだらかな笹のスロープである。休息の後、行動開始。ここから笹ヶ峰までは、石鎚山最大の難所である。途中には、西黒森、シネンゴの頭、東黒森、伊予富士、寒風山と千七百メートル級の山々が五座も鎮座し、伊予富士のキャンプにきていた友達を誰一人憎めないだろうし、憎むことなどないに違いない。

でもキャンプで一番心に残るのはやはり食事の事だ。あの忙しく苦しかった食事作り、みんなで協力しあい一生懸命やった。ただ自分の食べる飯だったからだろうか、あの忙しくも充実した一時、僕の生活では今までとうてい味わうことのできなかった時間だった。何とかの宣伝でやっている『ホントノヒトトキ』はあんなものではないだろうか。

とりわけて感動的ではなかったこのキャンプでも僕には楽しかった夏休みの思い出だった。

（一N　植木隆造）

さわやかな朝、瓶ヶ森に向かう。シラサ峠にて、石鎚山が美しい。

真に友を知った
一番心に残った食事

キャンプ紀行

みんなが親身になって語りあったわけではなかった。心から歌いあったわけでもなかった。しかし僕はこの夏休みの僕達の一Nのキャンプを失敗だとは思わない。

八月四日から八日まで五日間、西本先生、河野先生のもと有志三十五人が参加。越知の小浜キャンプ場で行なわれた僕達のキャンプは幸い天候にめぐまれ、事故もなかった。

帰りのバスの中、T君のギターにあわせて歌いながら、五日間のキャンプを思い、なにか嬉しいような寂しいような気分だった。これはあながち僕がセンチメンタルなだからではなかったように思うのだ。

僕たちのキャンプでは男子の各テントごとに一人の女子を配分して、そのグループで食事は作り食べるようにしていた。僕の班は男子三名と女子はTさんの計四名だった。確かに食事というものはたいへんなものだった。カマド作りからマキ拾い、マキ割り、火つけ、飯盒で飯をたいたり、茶をわかしたりしているうちに拾っていたマキはなくなりあわててマキ拾いに走ったりしてとてもおかずをつくるには至らなかった。朝ご飯を食べおえたと思ったらお昼だったこともあった。それでも火のあおりや煙を顔に受けて真赤になりながらお鍋をかきまぜたことなどは忘れられないし、先生も呼んで熱い火のもと腹いっぱい食べた焼肉、できた時にはもうすっかり真暗になってしまっていたシチューみたいなカレーライスなども最高の味がした。

五日間もいると僕も同じテントの友達もつまらないことに腹を立てたこともあった。

いろいろな事があったこの五日間。僕はこのキャンプへ来ていた友達を知ることができた。彼らの日常を、善意を見た。もう僕はこのキャンプにきていた友達を誰一人憎めないだろうし、憎むことなどないに違いない。

でもキャンプで一番心に残るのはやはり食事の事だ。あの忙しく苦しかった食事作り、みんなで協力しあい一生懸命やった。ただ自分の食べる飯だったからだろうか、あの忙しくも充実した一時、僕の生活では今までとうてい味わうことのできなかった時間だった。何とかの宣伝でやっている『ホントノヒトトキ』はあんなものではないだろうか。

とりわけて感動的ではなかったこのキャンプでも僕には楽しかった夏休みの思い出だった。

（一N　植木隆造）

ひとこと

悩みあり

○…夏休みが終わると〝自殺〟がはやる（？）ようだ。新聞などにだいぶ〝自殺〟の記事が載っている。中には夏休みの間に自殺した女生徒もいるし、その前には、それこそ〝ジャリ〟というのがピッタリな位の子供までも…。そこで回りを見渡してみるが、自殺どころか、これから生まれてやるゾと云わんばかりの面構えの連中ばかりである。…だが。

○…しかし、開業以来たった十数年しかたってないような者達が、どうして死んでいくのだろう。責任をとってとか食いつめてとか…大人の自殺には具体的な理由があるが、学生達の自殺の理由は理解できない。理由、動機を知る唯一の手段である遺書自体チンケなもので、死ぬ間際になって、カッコよかったような、体裁のいい文章を書いているが。その中には、もちろん理由などない。ただあるのは〝ゆるせ〟だの〝誰が悪いのでもない〟だの本当に理解に苦しむ。

○…そういう運命なのさ。とか気が弱かったから。だとかいう臆測の域を出ない議論はよくなされるが、同世代のものとしてどれにも、やっぱり抵抗を感じざるを得ない。私事…なのだろうから、僕達はあまり立ち入るべきではないかも知れないが…。

○…庄司薫氏の言い分を借りると、亡命型、つまり、ただ人間の世界から逃げだすための手段。もしくは、生存競争に敗れたがための自殺と見ることができるようだ。また、純粋ながために敗れたということを表現したい（敗れたという事を、あらかさまに見せつけることによって、敗者と純粋を合致させたい）のだそうだ。

○…こんなに考えると〝自殺〟なんてものは、人間ばなれした連中のする事じゃないか？なんて思えてくるのだが、決してそうではないように思う。他の誰とも変わらない人物がするものと予測できない。…しかし、その動機は、我々が考えるより案外簡単なことではないだろうか。それを自分自身で追いつめ、巨大にして、結局もてあまし、思いあまって自殺。…こういうケースが多いのではないだろうかと考える。

○…そこで提案したいのだが、学校は、カウンセリングの設置充実（？）に力を入れるべきではないだろうか、と。巨大な悩みになるまでに取り除いてやるよきコーチが是非必要だと思う。土佐校でこのような最悪の事態を引き起こさないためにも…。

（H・K）

すごい地元の応援

総体紀行②

硬庭

七月三十日の夜九時、高知一大阪フェリーは、とても混雑していた。我々は乞食よろしくデッキに毛布をしいて寝た。翌三十一日、大阪港に着いた。そこからは交通機関と名のつくものは、本当に全部使ったんじゃないかと思うくらい。乗りつぎ、乗り換え、〝やっと着いたな〟って感じで福島県の平駅に到着した。

八月一日の開会式に続いて今日から試合が始った。団体の一回戦は何とか茨城高に2−1で辛勝した。しかし、応援の差はイカンとも仕難く、二回戦では相手校の応援で吹き飛ばされてしまった。対戦したのは地元の磐城高で応援は二百人位。ポイントを上げると同時に、ワーワー、キャーキャー、……までは水場がないので苦しい。

シネンゴの頭をトラバースにして東黒森の頂上に立つころにはもう日は瓶のあたりに沈みかけてきた。伊予富士の水場まで駆け降りる。今日の行程は完了。五時にキャンプインした。

七月三十日

昨日の疲れかやや寝坊。午前十時頃パッキングして出発。伊予富士をトラバースして桑瀬峠へ下る。桑瀬峠は縦走路中の最低の鞍部で、ここから寒風山までの登りは登山者泣かせの急坂である。頂上には遭難者の碑がある。「山恋しければ、君恋し」

山頂で一時間休み、笹ヶ峰へ向かう。寒風山と笹ヶ峰の間の小さなピークがつらかった。

笹ヶ峰の頂上には、大きなケルンがある。またこの付近は、名前の通りの二面熊笹のスロープである。天気が良かったので展望には満足できた。急降下をはじめると赤い屋根が見え始める。丸山荘のキャンプサイトに設営した。

七月三十一日

下津池まで下りてヒッチで東宮まで行った。東宮で泳いで西条から列車で帰る。

今、私は無心に汽車の窓から景色を見ている。思えば長く、短い六日間。苦しく楽しかった縦走が今、終わろうとしている。筒上山の頂上を踏んで思わず叫んだ、「ヤッホー」。土小屋から見た瀬戸の島々。二ノ森の頂上で石鎚を見ながらかじったレモンのすっぱい味。俺はどうして、いやいやながらも山に登るのか…。笹ヶ峰の夕焼の中で孤独になった時しみじみと、山とのふれ合いを感じずにはいられなかった。

高知に着いたのは九時を過ぎてからだった。

（一K　水田康彦）

人びとくらし

歓声と拍手の総攻撃、我土佐高の応援団は…。言わない方が無難みたいだ。しかし、よく健闘し、1−2で惜しくも敗れた。

翌日は試合がなく、その次の日、八月四日のシングルの試合に臨んだ。試合前の下馬評ってんでは、とても歯がたたないなんて言われていた相手を小柄な堀見が一回戦で敗り、我々一同もろ手を上げて大喜びした。彼は小気味よく動き、二回戦でも第一セットを先取したが、逆転されて今度は葬られてしまった。同じシングルに出場した西はとにかくものすごい試合をした。0−3とリードされた彼は、執念と言うか、異常な程のねばりというものを見せて13−12と逆にリードしてしまった。このマッチポイントで彼の必殺のボレーは、するどく空を切る。超ロングゲームの末、ついに本当についにという感じで敗れてしまった。

（二T　井上裕靖）

どっかの中学校の女先生が生徒の音楽の成績をオール3にしたことで問題になっている。いうなれば無責任な先生に他ならないが、何かこう〝英雄〟的イメージもついてくる感じだ。その先生もう三十二才だそうだから、何事も考えたあげくの仕業か、それとも突然発狂か。という事になるが多分、前者の方だろう。▼昔、戦前の田舎の小学校の教師に、酒ばかり飲んで授業をしなかった人がいたという。その人は毎朝学校へは来るのだが「おーい、今日は自習ぞ」と一声かけて、自分は用務員室かどっかで、酒飲んでゴーゴーとすごいいびきをかいていたとか。それで通知簿はどうするかというと「甲、甲、乙、乙、丙、丙…」と語呂合せ。「甲、乙、丙、丙…、こりゃあ語呂が悪いきやめた」▼最近、もちろんこんな先生、いや英雄はいない。昔は充分それでもよかったが、今は猫もしゃくしも大学、大学。で教師の方も受験生並み。おおらかさ（？）がない。昔がなつかしいなと年寄り地味たことを言う。▼高知県は、どちらかというと、教員組合の力が強く公立中では補習は差別教育だといってやらず、公立高へ九〇%以上の合格率。昔ながらの豪傑が多いようだが、他県では、中学受けるも、高校受けるも、大学と大差なしなんて所があって、ソッとさせられる。▼話は元にもどるが、オール3をつけた女先生に感銘を受けた生徒約三十名近くが「授業ボイコット」というこれまた現代の英雄的行為をしたという。中学生も強くなったものだと感心させられる。けれど、無理なことをしたものだ。オール3にしろ、授業ボイコットにしろ…はかない抵抗でしかない。▼それにしても、何故、その学校、オール3女先生をクラス担任から下ろしたりしたのだろう。音楽の成績なら高校入試に関係ないだろうに、そして五段階評価が疑問視されている時なのに…。▼いつの日も、どこでも学校とは保守的なものだということ、まざまざと見せつけられたといってしまえばそれまでだが、何か理解できない気がしないでもない。しかし、それ以上に理解できないのは「生徒達がかわいそうだ」と言って担任を下りることを早々と決意し、今までのせっかくの行為を棒に振ってしまった女先生の行為だ。女の感じようさ、では納得できない気がある。全国的な問題なのに。結局、一時の発狂状態にすぎなかった、ですますつもりだろうか。▼こんなこと書いたけど、やっぱり通知簿は、総点九九八点、平均九〇点。全体で1番、クラスで3番（？）とハッキリ出してくれるのが、ドライで一番いいと思う。

（H・K）

紳士服装専門店
お誂紳士服
高級既制服
男子専科…ヤングマンコーナー
＜土佐高制服オーバー指定店＞
廣松屋
大丸北口前　TEL ㉒ 2338, 2339

記録しておきましょう。
思い出の宝庫、学園生活
その輝ける一瞬を
たのしさを売る
キタムラの
キムちゃん
キタムラカメラ
サービスチェーン店
中村店　升形店　アタゴ店　本店　追手筋店　サエンバ店　さんばし店　安芸店
フジカラー
堺町2−26　TEL㉒−1641（代）

進学状況 昨年を大幅下回る

大学 生活面にも問題が

47年度

▽ 指導部で昭和四十七年度の本校生（浪人も含む）の大学進学状況がまとめられた。それによると、本年度のべ△

▽ 合格者数は昨年度の人数を大幅に下まわり、過去七ケ年の最低の成績となった。また、合格率も五〇％を割って△

▽ しまっている。△

受験者総数の四百九十八名に対して、のべ合格者数は三百五十二名。これは昨年度を八十名、一昨年度を百四十名下まわっている。また、合格率も四十九パーセントと五十パーセントを割った。

学部別では、例年通りトップは工学部の五十六名（五十六）、続いて法学部の三十七名（四十六）医学部の三十三名（三十五）、文学部の二十一名（二十七）となっている。

学校別に見てみると、かなり多くの学校で昨年度の数を下まわっている。国立では東大が十三名から十名になったのを始め、京大で四名、阪大で七名など軒並にダウンしている。私立の方でも早大で四十一名から三十三名になったのを始め、慶大で七名、中大で十二名、同大で十名、立命館で十名と国立以上の衰退を示している。

本年度の成績不振については、いろいろと言われているが、やはり一番には学力不足があげられよう。また、ある先生が「今年の成績の悪かったのは、髪を長く伸ばしていた事と、遅刻の多かったことだ」と語られているように学習面だけでなく生活面において堕落していた事が大きな原因の一つだと考えられる。

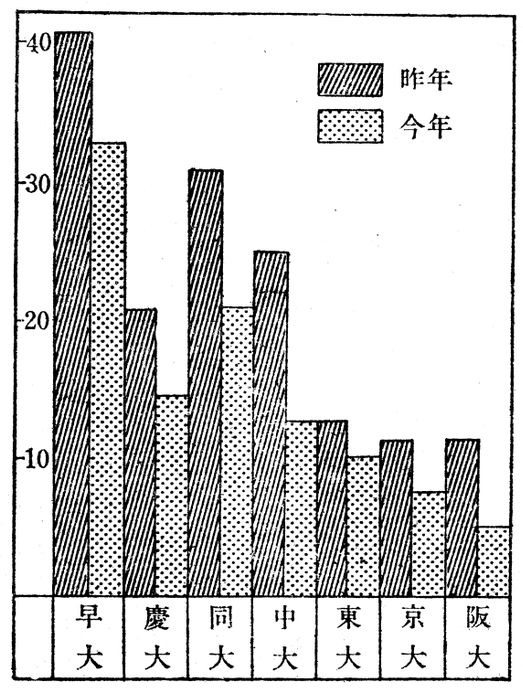
この問題については、今度の受験生だけに限ったことではない。今後、受験する者にとっても大切な問題であろう。たしかに近頃は遅刻も多くなったし、身なりもだんだん悪くなっているようだ。無帽化されていないのに帽子をかぶっていない生徒もいる。ただ勉強さえすればよい結果が出てくるというものでもなかろう。生活面での堕落が学習面にも何だかの形で現われてくるものだ。我々もこのことはよく考慮に入れておくべきであろう。

山岸先生談

本年度の大学入試の結果は余り芳しくなかった。これは、種々の原因があると思うが、結局は学力の不足だ。理科系の志望者増、特に医学部志望者の急増がその原因の一つであるが、この困難を突破する力が土佐高生にないとは信じられない。大いに奮起してもらいたい。

大学入試は高校における学習の範囲内である。これを完全に消化すれば絶対に恐れるものはない筈だ。それは平常から真剣に学習を重ねる他に道はない。

特に高三の諸君に注意したいことは、相手は全国にあり、なお十分な学習量を蓄積している浪人の存在を認識することだ。諸君はこの一年無駄を省き、僅かな時間を活用して決戦の日まで一歩一歩と目的に向って邁進してもらいたい。



47年度前期執行部

再興の足がかり

『土佐校生気質』に望み

四十七年度前期執行部はその成立が例年より大幅に遅れ、活動を開始したのは五月十日であった。

前期執行部は昨年度執行部からの移行時に会長及び副会長の立候補者がなく、旧執行部がその肩がわりをしていた。やがて旧執行部が解散を決定するに至り、この状態を見かねた文化部連合の次期会長予定者と執行部史上初の高三候補が立候補した。これにより執行部の断命はさけられたものの副会長候補は〝たのみこんで〟集めたという。

前回の執行部選挙により会長は文化連合会長予定の西村君となり高三会長の出現はならなかった。

「執行部の再興を図るための活動と内容を知ってもらいたく…」と西村君の言であるが、今回の執行部、従来の執行部には見られなかった定期的な機関紙の発行をしている。

クラスマッチや運動会、文化祭など学校行事の準備や企画は執行部が受けもっているが全ての面で縁の下的な活動は目立たず〝生徒から遊離したもの〟だとか〝何をしているのか分らない〟などと言われてきた。そして自然と生徒の無関心を呼び、委員の苦労だけ多く生徒間からの反応は皆無になり、執行部の活動は停滞気味となる。これは全国的な傾向だそうだが、この対策として『土佐校生気質』と名うった機関紙が発行されることとなった、会長の西村君は「あまり期待できるものではないですよ」と言っているが、なかなか親しみて持てる内容である。これは一つの案であるが、この機関紙に生徒あるいは先生方の意見や提案をのせアンケートなどと併用すれば今まで困難であった連帯の場の形も可能だろう。

もうすぐ後期執行部への移行があるが、この『土佐高生気質』を受けつぎせっかくの足がかりを中途半端に終わらないようにしたいものである。

本年度前期高校執行部

会　長…西村　卓士君（二T）
副会長…寺崎　祥平君（一S）
〃　〃…石井　英之君（一N）
広　報…藤田　喜司君（二S）
各部担当…井上　英則君（二T）
H　R…杉本　優君（二H）
美　化…川村　明君（一N）
書　記…山村　貞雄君（二S）
〃　〃…市川美和子さん（一H）
会　計…山崎美紀さん（一H）

本年度前期中学執行部

会　長…浜田　義彦君（三D）
副会長…北島　勲君（三C）
　　…依光　成元君（三E）
中央委員…小野　歩君（三E）
　　…田川　浩三君（三E）
　　…花岡　猛文君（三A）
　　…高尾　啓介君（二A）
　　…中内　憲二君（二E）
　　…井上　昌延君（二D）

学校訪問記

礼拝で始まる毎朝

授業課目にも〝聖書の時間〟

清和女子中、高等学校の巻

四月下旬、初夏を思わせる暖かい土曜日の午後、わが新聞部は自転車でさっそうとミッションスクール清和女子高校に出かけていった。

ハリマヤ橋より西に約三キロメートル、鏡川橋の手前を少し北に入ると美しい花壇と緑に囲まれたクリーム色の校舎があった。こじんまりとした雰囲気である。

この学校は明治三十四年に南長老派という新教の一派であるダウト女史（米）が伝導を目的に来日し、少数の少女を集めて開いたそうである。その後高知女学会―清和女学校―清和女子高等学校と改名、ミッション（日本伝導本部）の経営となり昭和四十年には中学校を併設して現在に至っている。

生徒数は中学高校を通じて三百九十五名。毎朝八時三十五分から二十分間礼拝があり先生方からキリスト教についての説教が行なわれる。教師数は二十八人でその全員が、どこかの教会に属しているクリスチャンである。授業課目にも〝聖書の時間〟が週に二時間あり聖書の解説をしているそうである、また英語の授業にはアメリカから来られた牧師先生が専任しており週六時間、選択では十二時間と語学に力を入れている。

この学校の特色の一つとして聖書にいう〝六日働き、一日休む〟のとおり日曜日のあらゆる活動は禁止されている。しかし生徒達にはこれが最も大きな問題だそうである。たとえば運動部などは試合が日曜日にかかる毎に棄権しなければならず、一般生徒も「日曜日は映画にも行いて、年の暮れには施設を慰問しているそうである。生徒会は一般生徒の無関心と認識不足で不活発だという。

一生徒に〝宗教についてどう思いますか〟と質問すると、「宗教は必要と思います。いつも自分を善くするよう心がけるようになるから」

〝牧師先生について〟

「先生のお話は私達に感銘を与えます。先生と生徒は自由に話ができ、断絶はありません」

〝自校に望むことは？〟

「望みですか、今のままで一応満足してますが、日曜日が窮屈ですね…」

〝聖書を読んだことのない人達についてどう思いますか〟この番問にはノーコメント。

〝現在学校の問題点はどこでしょうか〟

〝自校に望むことは？〟

「制服がルーズになってきていること、長すぎるスカートをはいて来る人がいるとか。それに一番の問題はやっぱり日曜日のことだと思います」とここでも日曜日のことがでてきた。

清和の学校方針は〝清く正しく〟だそう。その他きびしい寮の生活や、共学に対する賛成意見などの話をして下さった。一応質問も底をつき今度は生徒会の方に学校内を案内してもらった。

まず毎朝礼拝を行うチャペル、外見は何の変哲もない体育館であるが、内部前面のステージには十字架の入った教壇があった。次に僕達は花壇の横を通って一般教室に入った。幾何学的デザインのモダンな建物である。一クラスの人数は中学四十五人、高校五十人だそう。教室にある天窓風の明り取りが教会のステンドグラスを連想させた。せっかくここまで来たのだから屋上に昇る。校舎の西側にはグランドがあり先生と生徒が楽しそうにソフトボールやテニスをしていた。

続いて案内されたのは昭和二十八年に建てられたという一番北側の校舎。ここには生物室や化学実験室、図書室、音楽室などがあり化学の授業などでは大半が実験だという。

一通り学校内を見せていただいたが、校舎に関する限り宗教色は感じられなく非常にシンプルなものであった。しかし先生と生徒とが何のこだわりもなく自由に話し合い、またいっしょにスポーツを楽しめるのも、同じ宗教の中で生活しているからなのだろうか。この様な学園もあったんだナァという思いをいだきながら、西日のさす中を帰路についた。

×　×　×

自転車置場

ただ今、検討中

制限区域の拡張も！

待望の体育館の工事も始まったが、その中で問題が再燃化してきたのが自転車置場の問題である。

高校はまず問題はないのだが、中学では置場の不足に頭をいためている。運動場などに仮に設けられた場所を含めても、収容総数は自転車通学生（中学のみ）の総数四百五十名に遜くおよばない二百三十台前後である。二百台以上はみ出してしまっている。そうした自転車は体育館と中学昇降口の間のあき地に所狭しと並べられている。しかし、もちろんここは自転車などを置けるような所ではないまた、正規の自転車置場にしても中二の使っている所は地面が低いので水がたまりやすく、中三の使用している所は、雨が降るとぬかるんでしまって、スタンドが立たなくなるような状態である。

しかし、置けるうちはまだいい来年度からは自転車置場が高校置場と新しく造られる予定の小さな置場だけになってしまい、中高合せて千台余りを七百台の収容能力しかない所に入れることになる。

また、これで混雑が予想される時には、制限区域を広めるということである。高崎先生は、今の状態について「年度中いっぱいは置けないこともないと思う。混雑は生徒自身で自主的に解決して欲しい」と語られた。また、校長先生は「中学に小さな自転車置場を造る予定だ。そして高校用の方にも中学のものを入れるようにしたい。制限区域は広げるかどうかは、今検討中である」と語った。

スポーツ

甲子園の夢破る

野球部

七月十八日から高知市営球場で行なわれた全国高校野球選手権大会の県予選で、二回戦東工を3―1、準決勝で高知工専を4―2、代表決定戦では高知高を3―0で破り南四国大会へ出場した。南四国予選では徳島の海南高と対戦し、前半4点リードされながら四回に逆点、結局10―4の大差で勝った。しかし、甲子園をかけた決勝では、強豪高知商と戦い、善戦むなしく3―0で敗れ去った。

水泳部

八月十三日行なわれた四国中学総体の水泳の部で北村君（三C）が二百メートル個人メドレーで二位に入賞した。また同四百メートルでも二位に入った。この競技で北村君は5分40秒5の県中学新記録をマークした。

インターハイの結果

▽**硬式庭球部**

男子団体戦、一回戦茨城高を2―1で破ったが、二回戦磐城高に2―1で敗れた。個人は単複とも一、二回戦で敗れ去った。

▽**バドミントン部**

男子団体戦、一回戦名電工を3―0で破ったが、二回戦桐生市商に3―0で敗れた。個人は硬庭同様単複とも一、二回戦で敗退した。

▽**軟式庭球部**

池・吉村組が三回戦まで進出した。

▽**柔道部**

予選リーグ、日大藤沢に5―0初芝に3―1で敗れ、決勝リーグ進出はならなかった。

間谷 永野 両先生が御結婚

去る七月二十六日、私達新聞部員は間谷、永野両先生の結婚式取材に行った。残念ながら結婚式の方は出席できなかったが、同日午後六時より農協会館六階ホールで行なわれた披露宴に出席することができた。

当日、電気を消した場内では、各テーブルに置かれたランプの光の中で、披露宴が着々と進められやや緊張した面持ちのお二人に、たくさんの祝辞がのべられた。やがて、静かなオルガンの音が流れお二人の手によってウエディングケーキにナイフを。その後、お二人の御両親に花束が贈られた。この時ウエディングドレスに身を包んだ永野先生の目に涙が浮かぶ。

場内の電気がパッとつき二回ビールで乾杯。私達の出て行った後も会場にはにぎやかな雰囲気が漂よい、若いお二人の門出にふさわしい披露宴であった。

新任紹介

山本美保子先生（国語担当）

同先生は、体育担当の山本先生の妹さんで、また本校の先輩でもある。現在両親と一緒に土佐市に住んでいらっしゃるという先生、趣味は手芸、好きな花はみかんの花だそうである。本校の印象をたずねると、「女の子にがむしゃらな子が少なくなったみたい。高校時代に無理して遊ばなくても、大学に入れば楽しいことが待っている」とお答えになった。お茶の水女子大学を御卒業後、本校に赴任された。現在二十三才。

河野浩先生（数学担当）

同先生は、本校について、「気持ちよく毎日を送れるような学校だね」とおっしゃる。趣味は釣とカメラだそうである。「学生時代は京都にいたから、京都という土地の印象が非常に心に残っている。それと色々な面での勉強不足が悔まれるね」と学生時代について語られた。「もっと自分自身の勉強を深めてゆきたい」とも付加えられた。京都大学を御卒業。現在三十二才。

西上良一先生（物理担当）

「今日はここまで」と授業の最後におっしゃる先生は、大学時代にはコーラス部にはいっていたとおっしゃる。趣味はクラシック音楽と映画鑑賞だそうである。本校については、「エリート校いって聞いてたから、最初不安やったけど教えてみると、明るくて南国土佐の感じがそのままなように思う」と答えられた。また、学生時代の思い出としては、コーラス部の演奏旅行や、定期演奏会が一番心に残っているそうで、「将来できればコーラスをやってみたいね」ともおっしゃられた。二十三才。

有沢善和先生（数学担当）

現在二十四才の先生は、フィシング、将棋、音楽鑑賞が趣味であるそうだ。どこか行きたいところは、とおたずねすると即座に「磯釣かよく釣れるところを知りませんか」とおっしゃった。フィシングが余程お好きなようである。本校については、「『土佐校はええ学校』というのが、世間の通説のようである。誰に問われても、『土佐校はまっことええ学校ぜ』と、はっきり言えるようになりたい」とおっしゃられた。将来の抱負は、自分の専門をマスターし、ふやしたいということだそうである。現在二十四才。

間谷和正先生（社会担当）

「戸籍では二十五才、でも実際は十九才だよ」とおっしゃる先生は本校の御卒業生である。先生が在学中の頃と比べて現在の本校生は変な知識や遊びを覚える傾向にあるそうである。「将来、ヨーロッパの遺跡を巡ってみたい。日本では、京都、奈良、鎌倉の見残したところへ行ってみたい。」とおっしゃる。永野先生と御結婚されたことは誰もが知っていることである。

朝の自然と私

森木陰井先生

自然をこよなく愛する私は、いつの間にか、自然にとりつかれて、自ら自然へ近づこうとする心、自然も私に近寄ってくるかのような気持で、心は爽やかである。

この傾向は俗にいう歳の所為だろうか、すなわちそうとは断言できなくとも、所詮、私の性情とか趣味とかが私の学究に繋がって生じたものであるということである。

無性にはたらく自然への執着が私の心をかりたてるので早起きを余儀なくする。そこに私の心身の健康が保たれてくる。

早朝の自然は実に美しい。雨の日のそれも捨て難い風情が漂っていて、心情の柔らぎと落ちつきとを与えてくれる。それ以上に快晴の日の早朝の自然の良さは最たるものである。

私の日課は季節によって多少のズレはあっても朝六時の起床から始まり、雨さえ降らなければ、身づくろいを急いで家を出て静寂な街のたたずまいに気がねもせず、柳原の忠霊塔のある丘に、山内神社の境内に、高知公園にと時を変えて出かけることにしている。

そこで先ず、ラジオ体操から始まる、新鮮美味な豊かな空気を胸一杯吸い込むこと十数回、その爽快は何物にも替え難く、つづいて五体の屈伸になると、何事も考えず無我の境地で必至になる、ただ自だけは自然の景物に向けている。身も心も軽くなって、腰を据え、悠然としたそこには連想も空想も交えて観賞の境地に彷徨する。

そうするうちに、いつとはなしに先方を行き交う人かずも増えてくる、その中には早朝ならでは見ることのできない人物も登場してきて、おもしろくもあり、おかしくもある。

こうした習慣が遂に私を自然と切り離すことのできないものにしてしまって、中断などという大それた心変わりは許されなくなる。

帰宅後の朝食の美味は、その日の生活の潤いと活気とに大きな糧になる。

も早、こんなことの繰り返しが続いて、五年、六年を閲している。ことの初めは戦前に溯るが高知公園での朝のラジオ体操会に出席した頃からで、随分と朝の自然とは、縁つづきなことである。

現在私がこうして息災に消光のできるのも、その所為かも知れない。朝の柳原で見る、南の山なみ、筆山から小石木にかけての木々の緑も季節の移り変わりで、色彩も変わるものの三、四月頃桜花の白く、うす紅の群がりと常緑樹とのコントラスト四、五月頃筆山の中腹から山麓の樹々の葉梢と白く煙る椎の木の花群がりが発しあがっている新芽の緑が、際立って柔かくむくむく浮び上っている風情は一幅の掛軸にお馴染であって情豊かな存在である。

目を更に右に転ずるあたり民家が緑樹の間に点在し、公の施設が雄々しく背景の山並みに入り交り自然美を幾分阻害しているかのようだが緑で軟らげられほめられても悩めない。これらの情景に加えて鏡川の清流は更に点数を稼いで、なお余りのある代物であろう。往年は、今よりももっと清らかにして豊かな流水を湛えたたずまいであって、市民の誇りの一つでもあった。

その昔、やんごとない、さるお方が、今も残っている、三翠園の鏡川沿いの館から川を眺められ、あまりにも清く美しい川面に映える景色を称賛されて「美しきかな」と仰せられ、その館の呼び名が水哉閣として今日に至っている。

自然豊かなこのかいわい、特に朝のそれは最上である。

先生 出番です

編集後記

長かった夏休みも終りをつげ、二学期も軌道に乗ってきた。秋といえば、食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋などといわれるようにしのぎやすく活動しやすい季節であるが、我新聞部はなんとも淋しい秋を迎えた。高二の全員退部により、ついに部員数は、高一・二名、中三・一名、中二・一名の計四名となってしまった。全く淋しい限りだ。ここで声を大にして言いたい。〝新聞部の門をたたいてくれ〟と。

この号では初めて夏休みを特集してみた。来号は、伊藤先生の中国、廣谷先生の米国旅行をのせる予定です。

おわび

この向陽新聞93号は一学期の終りに発行する予定でありましたが、一面と二面にわたって大きく取り扱った、『我々にとってアナキズムとは』という記事を顧問の先生と特活部の先生に良くないと指摘されたため、新聞部内で話しあった結果発行を取りやめました。それにより発行がかなり遅くなり、また新任紹介など季節はずれの記事が残っていることなどを深くおわび申し上げます。

あらゆる万年筆
万年筆は
白亞堂
帯屋町東宝会館西　TEL ⑫ 2473

各種画材
額縁
水谷龍文堂　TEL ⑫ 0067
高知市帯屋町５４（大劇東）

古本誠実購入
井上書店
定休日　毎週月曜日
高知市帯屋町２の１―１
TEL ⑫ 3921

学生服専門店
児・島屋
高知・帯屋町二丁目
TEL ㉒5551

新聞部々告

新聞部は今学期以後の新聞発行の為、部員を募集しています。活字に興味のある方々は、おさそい合せの上、どしどしおこし下さい。

新聞部はこれまで某大入学者を多数出している他、優秀な先輩（ＯＢ）方に恵まれております。

なお、活動の中軸は高一ですので、高二、高三では充分な受験勉強ができるものと確信しております。